

■復興農学会長 巻頭言

## ますます必要とされる復興農学会

溝口 勝<sup>1</sup>Masaru MIZOGUCHI<sup>1</sup>

2024 年元旦に発生した能登半島地震により犠牲となられました方々に謹んで哀悼の意を表しますとともに、被災されました皆様に心よりお見舞い申し上げます。3 週間が経過し、この原稿を執筆している現在でも、行政・専門家・ボランティア等の懸命な復旧作業が続いていますが、皆様が一日でも早く安全・安心な生活を取り戻されますことを祈念いたしております。

さて、この巻頭言では今回の地震に際して、復興農学会が果たすべき役割について考えてみたいと思います。まずは、復旧と復興の違いです。ChatGPT に復旧と復興の違いについて尋ねると次の答が返ってきました。

**復旧 (Recovery)**: 復旧は、災害や危機の直後に行われる段階です。この段階では、被害を最小限に抑えるための緊急の対策が行われ、基本的なサービスやインフラの修復が行われます。復旧の目的は、生命を守り、被害を最小限に抑え、基本的な機能を回復させることです。例えば、医療施設や電力供給の修復が含まれます。

**復興 (Reconstruction)**: 復興は、復旧段階の後に行われるプロセスで、より持続的な社会の再建を意味します。復興の目的は、社会や経済の回復、より強化されたインフラの構築、そして災害や危機の未来への備えを強化することです。復興には、教育、雇用、住宅、経済活動の復活などが含まれます。

英語の Recovery と Reconstruction の単語が出てきましたので、さらに英語でこの 2 つの違いを尋ねました。

**復旧とは危機の後に通常の状態に戻ることであり、当面のニーズと安定化に焦点を当てる。復興とは、長期的な持続可能性とレジリエンス (回復力) に重点を置きながら、多くの場合以前よりも良い状態を取り戻すことである。** (英語を日本語に翻訳)

そう！前号の学会誌の巻頭言で私が「幸福を再び取り戻すことを目標として」提案した Resilience というキーワードが出てきました。皆さんは今月号の復興農学会誌の英語名が Resilience Agriculture and Sciences に変わったことにお気づきでしょうか？これは、復興農学会事務局が今年度始めに新体制になってから英語名の変更を検討し、復興農学会の全会員にメール審議の形で変更の可否を諮って決定しました。まさに今回の能登半島地震からの復興も Resilience を念頭に進めることが大切であると考えます。

では、復興農学会はいつどのように活動をすれば良いのでしょうか？

再度 ChatGPT に「限界集落の農村地域での地震災害復興において考慮すべきポイント」を尋ねた結果が以下です。

**1. 高齢化問題への対応** 限界集落は高齢者が多いため、復興プロセスにおいて彼らの身体的、心理的ニーズに特別な配慮が必要です。介護サービスや医療支援の強化が求められます。 **2. インフラの復旧と改善** 基本的なインフラ (道路、水道、電気など) の迅速な復旧が必要です。また、将来的な災害への備えとして、インフラの耐震化や更新が重要です。 **3. 地域コミュニティの再建** 地域の絆を再構築し、住民が支援し合えるコミュニティを形成することが重要です。これには、地域の集会所や交流の場の設置が役立ちます。 **4. 経済活動の再開と支援** 農業を中心とした地域経済の復興が必要です。農業支援、補助金の提供、地域産品の販売促進などが考えられます。 **5. 情報アクセスとコミュニケーションの確保** 災害時の情報伝達手段の確立と、日常的な情報アクセス手段の整備が必要です。 **6. 若者の関与と定住促進** 若い世代が地域に関わる機会を提供し、限界集落の活性化に繋げる必要があります。これらのポイントは、限界集落の特性を踏まえた上で、持続可能な復興を目指す上で重要です。

復興農学会の出番は、農村地域のインフラの復旧がある程度済んだ後の 2 以外の 1.3.4.5.6.になるでしょう。高齢者が多い農村地域で再び農業の担い手を確保できるのか。災害の多い日本の中山間地の多い国土をどのように保全していくのか。農村計画の視点を持ちながら考えていく必要があります。これは高齢化社会を迎える日本が抱える根本的な課題です。その課題解決のために復興農学会は被災した農村地域に住む人々の幸福を取り戻す「学」としてますますこれから必要とされるに違いありません。3月16日の復興農学会総会シンポジウムではこうした視点で議論したいと思います。皆様の積極的な参加をお待ちしております。

<sup>1</sup> 東京大学大学院農学生命科学研究科

<sup>1</sup> Graduate School of Agricultural and Life Sciences, The University of Tokyo

